瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 5
瑠璃集 …… 8
瑪瑙集 …… 15
紅玉集 …… 18
光耀抄月評 …… 19
総合誌の窓 …… 22
恵贈句集散見 …… 24
琥珀集作品鑑賞 …… 26
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 27
Ⅱ …… 28
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 29
季語は離して使う …… 30
紀伊風土記の丘 …… 32
私見光明皇后 …… 34
ギャル文字と平仮名 …… 35
一休寺吟行記 …… 36

2008/6　第27号

今月の一句

紫蘇しぼりしぼりて母の恋しかり　橋本多佳子

梅を漬ける頃になれば八百屋の店先、スーパーの野菜売り場には紫蘇の香が漂っている。手を紫蘇に染めて何度も塩で揉むと、濁った絞り汁が澄んだ紫蘇色の汁に変る。嵩はぐっと減るがそれを梅酢に放ったときに変る紅色は例え様も無い美しい色である。作者はその梅漬けの紫蘇をもみながらお母さんを思い出し、懐かしんでいる。中七の繰り返しがその心を深くしている。

塩路　隆子

PDF= 俳誌の salon

身づくろひ

塩路隆子

あたたかやビタミンEの琥珀色

息かけて声かけて撒く花の種

艶々と恋猫となる身づくろひ

四月馬鹿女難除けてふ守り札

春愁や妣の珊瑚の髪かざり

古代文字解せぬままや万愚節

神の恋かくと思ひし春の虹

氏素性良くも悪しくも花大根

初蝶のひらり躱はせり石仏

花菜径かごめかごめを知らぬ子と

PDF= 俳誌の salon

六月号光耀抄

塩路　隆子選

花明り華甲の人の祝帯　田下　宮子

卒業歌少女別れを学びけり　小澤　菜美

山里の落暉大きや蛙鳴き　杉本　綾

島椿散るや潮の香ほの甘く　北尾　章郎

花を来て彦根屏風の金ひかる　小林　成子

字の小さきフリーペーパー目借時　坂上　香菜

紅枝垂風を撮る人描くひと　鈴木　照子

軸替へていと華やげる雛座敷　駒井　のぶ

実感の湧かぬ骨箱春寒き　中川すみ子

ホワイトデー森嘉の豆腐貰いけり　新実　貞子

水仙のレトロ調なり先斗町　松田　和子

夕おぼろ灯影ゆらめく宿場町　笹井　康夫

雨なれど障子にほのと花明り　杉野原弘幸

朝寝して学生気分夢の中　竹内　悦子

PDF= 俳誌の salon

しばらくは風あそばせて雪柳　田中　芳夫
散る花に源氏の君の夢世界　谷澤　秀子
見納めといふが口癖花衣　日山　輝喜
夜桜に少し紅濃く待ち合はす　藤見佳楠子
休日の夫を労ふさくら餅　前川ユキ子
新駅の開業祝ふ初桜　増田　一代
医通いの為の服買う四月馬鹿　松田とよ子
佳人より受けたる会釈春日傘　三川美代子
猫瓶の背に春光のやはらかき　宮崎左智子
春灯を鏤め杜の造形美　宮田　香
京恋うて眺めてをりぬ春夕焼　森下　康子
若僧と観ている春の洋画展　和田　郁子
はかどらぬ旅の支度やリラの冷　古田　晴子
ジャムパンのジャムの片寄り万愚節　伊東　和子
春光やビルは仕上げのガラス拭き　伊藤　洋子
老犬の赤きベストや春の雪　伊庭　玲子
行く春や寺の本尊目をつむり　宇治　重郎

PDF= 俳誌の salon

芽吹きけり杜の榎は文化財　岡　佳代子

子規の句碑鴟尾借景の花の宿　笠井　清佑

鳥帰る「これより飛騨」の分かれ道　紀川　和子

三月の山青青と父祖の功　齋藤　徳男

ありのまま生きればいいよ花菫　藤本　秀機

魚島どき売れぬを嘆く島媼　森永　洋子

城跡の一角占めて花の宴　山本　千里

縁談のまとまる予感柿若葉　奥田かおり

独り寝の夏の夜更や遠ラジオ　平井　康允

いいきもち春のにおいがするみたい　中森　圭那

ほとけのざずらり並んでせいくらべ　塩路　彩人

花さいてエンデバー号帰ったよ　高野　綸

春のあじ竹の子ごはんおいしいな　廣瀬　結麻

カワセミが川で魚をくわえてた　塩路　翔

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

花明り

田下　宮子

北斎の濤の群青夏近し
金平糖の角まろやかやみどりさし
手品師のスロービデオや万愚節
白蝶を連れて親子の聖書売
花の下大道芸を人囲む
伽藍蕗を煮詰める香り夕厨
花明り華甲の人の祝帯

花時雨

小澤　菜美

辛業歌少女別れを学びけり
産土神へ合格お礼花時雨
チューリップ衛星写真に映らむと
お茶刻の鶯豊か背戸小藪
落椿曼荼羅絵図をさながらに
海底に漂ふごとし紫木蓮
ばあちゃん家(ち)の味付微妙春休み

春の光

杉本　綾

山里の落暉大きや蛙鳴き
春風邪に蜜泳がせてダージリン
陽を探し移せる鉢や翁草
ラケットで春の光を打ち返す
春風にスカートの裾ひるがへし
夕朧ひと日終りの鴉啼く
蓬萌えおのづと増える外仕事

PDF= 俳誌の salon

半仙戯　北尾　章郎

「きぼう」への夢を言ふ児や半仙戯
理髪屋は町のしるべや春灯
青き踏む詩の接ぎ穂を考へつ
春灯に痴漢注意の札立ちぬ
電子辞書密かに開き新社員
大島椿散るや潮の香ほの甘く
亡母いつも姉さん被り紅椿

金ひかる　小林　成子

天守より望む比良なり湖おぼろ
花卯木蕾はなべて湖へ向く
桜蕊降るや海津のかくれ石（義経の隠れ石）
残雪や比良八景の蘇る
桜散る海人舟舫ふ奥琵琶湖
花を来て彦根屏風の金ひかる
染めぬきし観音の幡鳥雲に

フリーペーパー　坂上　香奈

吹き溜る花屑美しやさくら色
雨もよひ香を含みたる桜東風
屋上より梯子架けたし春の雲
ブーメラン投げ合ふ親子夕桜
花蘇枋マニキュアの指刺繍さす
字の小さきフリーペーパー目借時
詩言葉の稀なひらめき風薫る

ロボットのやうに　鈴木　照子

ロボットのやうに辞儀する花の鹿
「きぼう」てふ宇宙と会話春彼彼岸
ガソリンの税に喜憂や四月馬鹿
周山の里を一望花峠
花筏都へ続く里の川
御車返し花の浄土の勅使門（常照皇寺）
紅枝垂風を撮る人描くひと

PDF= 俳誌の salon

雛座敷

駒井　のぶ

軸替へていと華やげる雛座敷
初つばめ四月二日の水曜日
あの濃さは桃の花なり遠目にも
荒地にも喇叭水仙逞しき
閨(ねや)に射す弥生満月翳りなし
庭の紅梅畑の白梅盛りなり
支柱欲しとえんどうの蔓蹠き出す

ホワイトデー

新実　貞子

思い出の人のダンディー花に酔う
ホワイトデー森嘉の豆腐貰いけり
母さんの強気遺伝子うららなり
親離れの最初の一歩入学児
新参の鶯啼ける新居かな
奏でいるピアノ旋律のどかなり
神鈴の太き綱振る合格子

春寒き

中川すみ子

亡夫送る曲の流れや花三分
会葬の御礼簡略鳥雲に
実感の湧かぬ骨箱春寒き
ＣＤにまかす読経や万愚節
会葬の文例本や花かおり
携帯を護身に春の夜道かな
甲子園リニューアルして春の風

好きですねん

松田　和子

水仙のレトロ調なり先斗町
幻想や桜織り成す夜の絵巻
観桜の後は至福の男酒
筍の歯ごたえ京の老舗味
お花見のお相手はんは京育ち
春寒し軋む引き戸の古厠
借景の桜見下ろす血天井

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

夕おぼろ　笹井　康夫

産声に貰ふ元気や芽立ち刻
忍耐もここまでだよと山笑ふ
草餅や故郷の味のよみがへり
一服の茶に和みけり桜餅
夕おぼろ灯影ゆらめく宿場町

芽柳　坂根　宏子

湖西なる石仏坐せり春の笑み
風光る湖畔ゆるりと風車かな
「大」の火の薪割る音山笑う
芽柳の揺れをくぐりて子ら遊ぶ
春雨というには激し砂利の道

四月馬鹿　塩路　五郎

ロケットナビにての旅行や四月馬鹿
丹波路の恐竜化石霾れる
癒さるる庭の古木の初音かな
歩く会のリュックに重る草の餅
天帝にときめいてゐる揚雲雀

花明り　杉野原弘幸

日展に入選の女梅白く
盆梅に琴流れけり長屋門
辛夷咲く校庭の空晴れ渡る
力入る横綱相撲春炬燵
雨なれど障子にほのと花明り

苺スウィーツ　鷲見多依子

春嵐ギアーチェンジがキーワード
日変りの葺スウィーツおとりよせ
花吹雪京の町屋の千年紀
雲低き光琳梅に雨の音
大風車吹飛ぶ春の嵐かな

PDF= 俳誌の salon

光耀抄月評

塩路　隆子

花明り華甲の人の祝帯　　田下　宮子

「華甲の人」の措辞に先ず感動をした。聞きなれない言葉であるが、広辞苑を開くと「華の字を分解すれば、六つの十と一になる。甲は甲子（きのえね）の意、数え年六十一歳の称。還暦。ほんけがえり」とある。「なーんだ」と思う人もあろうが、この句を「花明り還暦の人祝帯」としてみよう。目立たないありふれた句になってしまう。「華甲（かこう）」とすればこの句は一度に華やかさに加え、格調の高さまでも感じられる句に仕上がる。言わずもがな。「華甲」の働きである。更に「花明り」の季語がそれを助けゆるぎのない秀句に変貌している。見逃せない一句に出逢えた喜びを伝えたい。

卒業歌少女別れを学びけり　　小澤　菜美

「仰げば尊し」のメロディーは、日本の各種学校の卒業式の代表的な歌であることは周知のことである。式の最後に、在校生の「蛍の光」のあとに続き「仰げば尊しわが師の恩」が始まると式もクライマックス。式場のあちこちからすすり泣く声が洩れ始める。昨今は大学でさえ父兄たちの参加があり父兄の席からも万感をこめた涙が見られる。わが記憶を辿ると自分自身の卒業よりも先輩との別れが悲しく、ひそかに涙を拭いたほろ苦い思い出がある。青春の一こま……。

涙を流す少女を見て、学び舎を去る最後の授業と作者は感じられた。始めて経験をする別れの学習の日を今日の卒業式であると感じられたのであろう。今後の人生には沢山の別れがあるだろう。それに負けないで立派に生きてほしいという親の願いがひしひし身に沁みて伝わってくる。「別れを学びけり」の下五の切れがその感動の大きさを表現している。いい句である。

山里の落暉大きさや蛙鳴き　　杉本　綾

秋の日は釣瓶落しと言うくらいに刻々と山の端に沈んで行く。それに比べて春の日は暮れそうでなかなか暮れない。今沈まんとする大きい春の夕日を眺めてそのゆったり感を心行くまで見守っている作者。折りしも田植え準備を整えはじめた水田の遠近からは、蛙の声が聞えてくる。「落暉大きや」と霞みながら沈み行く春の入り口の茫洋とした大きさ、耳一杯に聞える蛙の鳴き声に感動を覚えている様子、山科の閑静な山里にお住まいの作者ならではのおおらかで閑寂味のあるいい作品である。

PDF= 俳誌の salon